

# 英語劇のためのヒント：シナリオ作成と舞台作り(2)

## Some Tips For Making of An English Drama: Scenario and Staging Vol.2

(2008年3月31日受理)

佐 生 武 彦

Takehiko Saiki

Key words : 英語劇, 日本むかし話, シナリオ作成

### 要 旨

本稿では、最新のオリジナル作品である“Kasa Jizo: The Stone Buddhas With The Straw Hats”（以下「カサ地蔵」）での幾つかの新しい試みを紹介しながら、前稿（2007）に引き続いて、英語劇のシナリオ作成と舞台作りのためのヒントを提示したい。シナリオ作成に関する新しい試みとしては、「二人三脚」及び「一人舞台」と筆者が呼ぶものがある。前者は、ナレーターに「突っ込み」を入れる役を配置し、二人の掛け合いで物語りを展開させて行く手法である。後者は、文字通り役者が一人で舞台上に立ち、一回の発話で大量のセリフを発するものを指す。今回の作品中では、主人公のお爺さんによる地蔵を相手にしたモノログがこれに当たる。また、原作には存在しない「それらしい話」を創作・挿入する「部分創作」というものについても新しい視点から少し論じておきたい。舞台作りに関しては、地蔵にまつわる事項について検討する。

### はじめに

前作の「花咲爺さん」同様、新作の「カサ地蔵」も中国短期大学英語コミュニケーション学科の専属劇団“The Peach Pits”のために、本稿の執筆者である佐生が書き下ろしたものである<sup>1)</sup>。そして、前作の“An Old Man And The Cherry Blossom”（邦題『花咲爺さん』）同様、今回の作品でも団員の人数、団員それぞれの性格や舞台経験、さらに各自の英語力等を勘案しながら、ストーリーを展開させ、シナリオを執筆ができたことで、前稿でも強調したオリジナル・スクリプトの利点は十二分に発揮されたものと思われる<sup>2)</sup>。また、以下で述べる制作上の幾つかの新しい試みによって、団員達は出来合いの「英語版・日本むかし話」では味わえない、オリジナルならではの面白みに接することができたものと思う。冒頭にて、再度オリジナル・スクリプトの有用性を確認してお

きたい。

### 1 なぜ「カサ地蔵」なのか

07年7月に10人のメンバーで「桃太郎」を演じた後、劇団の人員が6人に減った。このために、同年12月の公演に向けて、少人数で舞台作りが可能なものを題材に取り上げる必要が生じた。登場人物の数を重視するならば、06年12月に演じ、前稿でも取り上げた「花咲爺さん」が最も手頃かと思えたが、「難度」を理由に監督兼座長を務める筆者がその使用を断念した。「花咲爺さん」は、短大2年生の最終舞台用スクリプトとして、経験豊富な当時の各団員の属性を考慮に入れながら書いたものであったため、舞台経験2度目の1年生が半数を占めるチームには少し荷が重いと判断したためである。

この様な理由から、6人で出来る物語で、かつ新しい

スクリプト作成で取り組んでみたかった、主人公による「少し長目のモノログ」を可能にしてくれる演題として「カサ地蔵」が選ばれた。お爺さんが二度にわたって、地蔵を相手に独り言をいう機会は、スクリプトを書く者には刺激的であり、完成したスクリプトを演じる者にとっては、やり甲斐のある役になるものと思われた。さらに、中心になる登場人物が「おじいさん」と「おばあさん」の二人だけであるため、配役の設定において、いささか創造的な措置を施す余裕があるかと考えたからである。この創造的な仕掛けが、以下で述べる「二人三脚」である。

## 2-1 「二人三脚」定義

お伽話に「あり得ない話」はつきものである。と言うよりも「あり得ない話」があつてこそのお伽話であり、昔話である。お伽話の英語訳“fairy tale”の意味には、「うそ」というものまでである。また、子供に聴かせる話であるにも関わらず、教育上芳しくないと思われる内容も多々ある。「二人三脚」とは、その「あり得ない」或いは「おかしい」話を平然と語り続けるナレーターに、“Wait a minute!”（ちょっと待った!）と「突っ込み」を入れ、ナレーターとの間で問答を繰り返しながら、二人で語りを構築して行く手法である。

「カサ地蔵」の話にも、教育上の配慮に欠けた、「おかしいやん」と「突っ込み」を入れたいくなる箇所があり、実際に幾つかスクリプトに取り込んでいる。以下で3つの例を提示しながら、「二人三脚」の説明を加える。まずは、一番最初の場面から。

### 2-2 「二人三脚」事例1

Narrator: A long time ago, there was a poor old couple, Ojee-san & Obaa-san. They were so poor that they did not even have a piece of rice cake to celebrate New Year's Day. Since it symbolized good health and longevity just as it does today, it was customary to eat some rice cake on the very first day of the new year. The couple needed to earn some money in order to buy pieces of rice

cake. It was on New Year's Eve that they decided to go into town and sell the straw hats that Obaa-san made. <sup>3)</sup>

[対訳：むかしむかし、お爺さんとお婆さんというたいへん貧しい老夫婦がおりました。二人は、あまりにも貧しかったために、新年を祝うための一片のお餅も持ち合わせていませんでした。今日でもそうですが、お餅は健康と長寿を象徴するものであったために、元旦の日に餅を食べるのが習慣だったのです。この老夫婦には、お餅を買うためにお金を稼ぐ必要がありました。そして、大晦日の日に、お婆さんが編んだカサを街で売ることを決めました。]

Lefty: Wait a minute! Hold it, will you? Don't they have a son or two who might come back home to look after his aging parents? This is the time for a family reunion, isn't it? Time for all the family members to spend some time together at their old homestead. Where are they? How come they are not here with the old couple?

[対訳：ちょっと待った! そのまま、そのまま。彼らには息子の一人や二人おりませんか? 帰郷して老いた両親の面倒を見るよう息子さんは? 今の時期って、一族再会の時でしょ。散り散りの家族が、父母のいる懐かしい家屋でしばしの時を共にする。息子さんたちはどこにいてはるの? なんでこの老夫婦と一緒にいてはりませんか。]

### 2-3 「二人三脚」事例2

上でナレーターに「突っ込み」を入れるLeftyとは、ナレーター自身の左脳である。ナレーターが語る内容がところどころで、「非論理的かつ非合理的、従って、非教育的」なことで、そんなナレーションのために、論理と合理を司る己の存在が邪険に扱われていると感じた左脳が「幽体離脱」して自らの本体に「この話は教育上よろしくないの、語りを即刻止めるべきだ」と直訴するという設定である。以下は、ナレーターと「左脳」のやりとりである。

Lefty: <前 略>・・・This is why I'm out here to face you directly and to tell you how illogical

and irrational, and therefore, uneducational this story is. You'd better stop telling this story right now.

「・・・これこそが、私がここに来て、あなたと直に向き合い、この物語が如何に非論理的かつ非合理、従って、非教育的かをあなたに教えに来た理由なんですよ。」

Narrator: Oh, dear, it sounds really serious. Well, you should know it's just a fairy tale that we are dealing with here. Fairy tales are the stories for children, not for a grown-up adult like yourself, I mean, ourselves. You don't have to give too much attention to the logical consistency of a story, or anything of that sort, as long as children can draw a moral or two from the story. And the lesson this story tries to give kids is "Be thoughtful about even an inanimate object," and its corollary is "One who is kind to others is sure to be rewarded."

「あらまあ、えらくマジですね。あの～、ここで扱っているのは、単なるお伽話だということを知っておいてもらわないと。お伽話といえば、子供達のためのお話で、あなたの様な、いや我々の様な成人のためのものではないのですよ。ですから、子供達が、何らかの教訓を引き出すことだ出来れば、物語の論理的一貫性や、そういう類のものに過度の注意を払う必要はないのです。で、この物語が子供達に伝えようとしていることは、『生き物でないものにも思いやりを』、そしてその系として『情けは人のためならず』なのです。」

Lefty: Wait a minute, my dear. It's fine that kids can learn a lesson or two from this story. That's great! But, you see, the bad lessons that they may learn from this particular story will outnumber the good ones. This is what I've been concerned about! As I just wondered minutes ago, where is their son now? Kids might think it's OK to leave an old couple alone with nothing much to eat. They might die from hunger in a week. You know what? This kind of abuse of elderly persons might constitute a crime in the State of Oregon, USA. This is not very thoughtful, is it?

「ちょっと待った！そのまま、そのまま。子供達がこの物語から1つ、または2つの教訓を学ぶことが出来るというのは、それは素晴らしいことですわ。けどね、悪い教えが良い教えよりも数で上回るんですよ。私はそれを心配してるんです。少し前に疑問を呈したように、老夫婦の息子さんは今どこにいてはるんですか？この話を聞いた子供達は、『十分な食べ物もない状態で年老いた老夫婦を放置しておいてもかまわない』と考えるかもしれませんね？一週間後に彼らは飢え死にするかもしれないんですよ。いいですか？この種の老人虐待、米国のオレゴン州ならほぼ犯罪ですよ。これは思い遣りがあるとは思えませんが、如何ですか？」

## 2-4 「二人三脚」事例3

「二人三脚」のもう一つの「突っ込み」では、多くの日本むかし話に共通して見られる「頂き物の独占」が槍玉に挙げられる。「カサ地蔵」の場合は、話の終盤で雪の中を地蔵たちが老夫婦のために運んでくる正月用のお餅や酒の品々。お礼に頂いたそれらの品々を、善良なはずのお爺さんとお婆さんが二人で「独り占め」してしまうところである。英文の「突っ込み」は以下の通りである。

Lefty: <前略> ... Are you saying the old couple monopolized all that stuff all for themselves? Well, you know, this is something common to many Japanese fairy tales. Have you ever thought of that? Why didn't the couple share what they gained with other folks in the village? There may be some others desperately in need of food. I strongly urge the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology to put a complete ban on telling this story to children.

[対訳：あなたは、それらの貰い物は全部あの老夫婦が自分たちだけで独り占めすると言うのですか？あのね、このことは、多くの日本むかし昔話に共通してるって知ってました？そんなこと考えたことありますか？なんで老夫婦は自分たちが手に入れたものを村の他の者にも分けてあげようと思わないのでしょうか？めっちゃめっちゃ食べ物を必要としている者がおるかもしれませんよ。私は、子供たちにこの話する事を全面禁止するよう文部科学省

に強く求める。]

## 2-5 敢えて「突っ込まなかった」事例

「あり得ないこと」と「おかしいこと」に突っ込みを入れながら話を展開するのが「二人三脚」の手法であるが、脚本中で敢えて突っ込まなかったところがある。地藏がお礼に品物を運んでくる場面がそれである。その理由を、「左脳」のセリフを引用して、以下に紹介する。

Righty: And this is the end of our version of Kasa Jizo, or the Stone Buddhas with the straw hats. Oh, just a moment. Before we close the show, I wanna ask you one thing: why didn't you throw cold water when the story was telling about the Buddha statues bringing all that stuff? It was the most irrational part of the story.

「これで、私たちの『カサ地藏』を終わります。ああ、ちょっと待って下さい。ショーの幕を引く前に、一つ尋ねたいことがあります。あなたは地藏がものを運んで来るというくだりで、なぜ突っ込みを入れなかったのですか？あそこがこのお話の中で一番おかしいところですよ。」

Lefty: Well, that's because we don't call it irrational; we call it fantasy. And mixing up the two would be a serious intellectual miscalculation and is therefore highly irrational. And if you do not accept those fantasies, we will have no fairy tales in which to play a part.

「左脳：あー、その理由は、我々はそれを不合理なバカげたこととは思わないからですわ。私たちは、それをファンタジーと呼んでいます。これらの2つのものをごちゃ混ぜにすることは、知的な勘違いであり、それこそが、極めて不合理なものなんですな。それに、もしそのファンタジーを受け入れなかったら、演技をするためのお伽話がなくなってしまいますからね。」

尚、「Righty “は、ナレーターが途中で体調を壊したために、ピンチヒッターとして同じく「幽体離脱」したナレーターの右脳である。

## 3-1 「一人舞台」(モノログ)

自作スクリプトの利点は、演じる者の力量に応じて自由にセリフを創作することが出来ることである。このことは、これまでも何度か指摘してきた。今回は、主役のお爺さんを演じた2年生に「少し長目のモノログ」に挑戦してもらった。ナレーターによる語りとは違い、身振り・手振りが加わったモノログは、劇団としても初めての試みであった。主役を演じた学生にとっては、4回目の舞台となり、短大最後の公演ということもあって、やり甲斐のある配役を与える必要から、筆者が書き下ろした作品である。このモノログの部分について、彼女は公演の前日まで「自信がない」と口にしていたが、本番では見事に大役をこなした。以下では、作品中の2つのモノログから、長い方（長短合わせて34センテンス）を例示する。

## 3-2 「一人舞台」事例1

Ojee-san: Hi, everyone, good to see you again. Um, I should apologize. My hats didn't sell. Nobody needed a hat, even when I offered a 25% discount. It turned out that I'm not able to leave you anything. I'm awfully sorry. You must be starving.

Oh, sorry! I didn't recognize your heads are covered with the snow. It must have been cold with the snow on your head like this for a long time. OK, I've just brushed off the snow. What? Put the hat on? Is anybody around here? Someone said "Put the hat on," or so I heard. The voice sounded familiar to my ears. Is it Taro? You said, "Put the hat on?" You should have worn a hat.

Put the hat on what? Right, on the heads of the statues. Well, I humbly apologize for my lack of courtesy, because I'm putting on each of you a hat that's left unsold. Yet, they are good enough to keep off the snow. OK, here you go. All right, you look good with a hat on. Now, you.

You're looking good, too. Great. And you. Hey, a handsome little Buddha. And the last -- Sorry, I'm running out of hats. Um, well, you might not like it, but this is all I can offer you: my head cloth. Well, I guess I should start moving. Take care, everyone. Good bye & good night.

「みんな、こんにちは。またお会いできて嬉しいです。あの、あなた方に謝らなければならなことがあります。カサは売れませんでした。25%引きを申し出ても、誰一人としてカサを必要とはしませんでした。で、あなた方に何も置いていくものが無いのです。本当にご免なさい。お腹、すごく減ってますよね。」

あ、スママセン！気がつきませんでした。頭にこんな雪が。長い間、頭の上にこんなに雪が乗っかっていたなんて、冷たかったでしょう。もう、大丈夫です。私が雪を払い落としました。うん？カサを被せなさいって？だれかここに居るのですか？誰かが「カサを被せなさい」と言ったような、いや、私にはそう聞こえたような。なんだか聞き覚えのある声だったような。もしかして太郎かい？「カサを被せて」ってお前が言ったのか？お前こそ、カサ（帽子）を被るべきだったな。

カサを被せてって、どこに？そうか、お地蔵さんの頭にだね。どうか私の罰当たりをお許し下さいな。売れ残りのカサしか、お被せすることが出来ません。雪をよけるには十分だとは思いますが。はい、どうぞ。とってもお似合いです。あなたも、よく似合ってますよ。はい、こりゃハンサムなお地蔵さんですな。では、最後の…。すみません。カサがもう無くなってしまいました。あー、お気に召さないかもしれませんが、あとはこれしかございません。私の頭に巻いたこの布切れ。そろそろ行かなければなりません。みなさん、お元気で。さよなら、おやすみなさい。」

#### 4-1 部分創作

前稿(2007)で、筆者は原作とオリジナルティの関係について次のように述べた。「原作に忠実なストーリー展開やスクリプトは、小学生の学芸会でもない限り、退屈なものに違いない。ピッツの英語劇では、原作を大筋で押さえながら、必要に応じて追加、省略、アレンジ等を

施すことを、むしろ奨励・実践している。日本の昔話を英語で演じる劇団や脚本家のオリジナルティは、この逸脱する部分にしか存在し得ないと思うからである。」今回の「カサ地蔵」でも、上記の信条に則って、これまで以上の冒険的な創造的追加を原作に施している。要約すると以下の様になる。

「二人三脚」の事例1で“Lefty “が、「老夫婦には、息子の一人や二人いないのか」と突っ込みを入れた。ナレーターがそれに答えて「老夫婦はこれから、遠い昔に亡くした二人の息子さんのことを話すことになっている」と。上の3-1で紹介したモノログに登場する「太郎」が兄で、その弟が「次郎」である。老夫婦の語りで明らかにされることは、次郎が大きなスズメバチに刺され、後に過敏症にかかり死亡。兄の太郎が弟を追いかけるようにして、日射病を患って数日後に死去。原因は帽子を被らないで太陽の下で長時間遊んだこと。

この「帽子を被らない」ことで惨事を被った太郎が、お地蔵さんに「カサを被せてあげて」と彼のおとうさん（劇中ではお爺さん）に天から囁くのである。二人の息子について語るお爺さんとお婆さんの会話は、以下の通りである。

Ojee-san: Well, you may be right, the boys. Ever since they passed away that summer 50 years ago, the boys have never failed to visit us during the Bon Festival and New Year's Day.

「そうかもしれないな。子供達かも。50年前のあの夏に亡くなって以来、彼らはお盆と正月には必ずわしらのもとを訪ねてくれるでの。」

Obaa-san: Has it been 50 years now, honey? Time sure flies. We lost our two sons in just a week one summer. Our younger son Jiro died first after he was stung by a huge wasp.

「お前さん、50年になりますかな。時の経つのは早いですね。私たちは、ある夏、一週間の内に二人の息子を亡くしました。弟の次郎が大きなスズメバチに刺されまして、先に亡くなりました。」

Ojee-san: His elder brother Taro, a brave fighter, who was with Jiro when he was stung, peed on his younger brother, in an attempt to neutralize the wasp poison. Unfortunately, the pee didn't work

as it didn't contain ammonia, as people are often led to believe it does. Jiro died after suffering from anaphylaxis.

「次郎がハチに刺された時に、一緒にいた勇敢な兄の太郎はハチの毒を中和させようとして、次郎に小便をぶっかけたのですが、残念ながら、巷で言われるのとは逆で、小便にはアンモニアは含まれていなかったものだから。次郎は過敏症を患って亡くなりました。」

Obaa-san: Only a few days after Jiro's sudden death, his elder brother Taro also died, as if he kept his promise to always be with his younger brother as Taro used to say to Jiro.

「次郎の急死の数日後に、太郎も他界しました。「お前とはいつも一緒だ」とよく次郎に言ってましたが、あたかもその約束を守るかのように。」

Ojee-san: Taro suffered from sunstroke.

「太郎の死は日射病が原因でした。」

Obaa-san: The boy hated to put a hat on even on a hot summer day.

「あの子は、夏の暑い日でも帽子を被るのを嫌がりましてね。」

## 5-1 舞台作りの工夫



今回の舞台作りで工夫が必要であったのは、やはり演題になっている「地蔵」であった。仏教の教えにある「六道輪廻」との関連で、通常は6体の地蔵が必要になるのだが、ピッツ版「カサ地蔵」では写真1に見られるように4体とした。4体のうち、1体は団員が扮する地蔵である。写真にある3体の地蔵を2倍にして、6体の地蔵を用意すれば教義に適ったものになるのであるが、それでは「面白み」は出てこない。敢えて、3プラス1の4

体にした理由は以下の通りである。

一つは、「二人三脚」の紹介の際に取り上げなかったことであるが、「地蔵の数不足」を出汁にして、Leftyに「突っ込み」を入れさせるためであった。セリフは以下の通り。

Lefty: No. It's not what you just said. It's the number of the statues that matters. There ought to be six Bodhisattvas all together, but I see only four of them. What happened to the other two? Don't tell me they are having a snowball fight or something out there. Anyway, this is a serious distortion of the Buddhist teachings that talk about the six divisions of the possible states of rebirth.

「いえ。あなたが言ったことではありません。問題なのは、仏像の数です。6体の菩薩が居なければならないのに、4体しか見ませんね。他の2体はどうなってるんですか？まさか、そこいらで雪合戦でもしてるんじゃないですよ。とにかく、輪廻転生の6つの可能な状態を語る仏教の教えを酷く歪曲するものです。」

敢えて4体にすることで、「二人三脚」での「突っ込み」が持つ手法の面白さに加えて、地蔵の「個体数」が持つ宗教的意義を、ごく自然に配役のセリフに加えることができ、このことで劇そのものを引き締める効果があるのではないかとも思われた。

次に、地蔵4体の内の一つを団員が扮することで、客席から「笑い」を引き出すことができると考えたからである。お爺さんが地蔵のある場所で昼食のおにぎりをほおぼるシーンで、不動で常に正面を見ているはずの地蔵が、上から覗き込み、そして物欲しそうにお爺さんを眺めるのである。

## 終わりに

本稿では、日本むかし話の原作からオリジナルのシナリオを作成する際に、筆者が活用している方法を幾つか紹介した。「二人三脚」、「一人芝居」そして「部分創作」の3つである。「二人三脚」はナレーションのバリエーションとして、「一人芝居」は演技者にとってやり甲斐のある挑戦的な取り組みとして、利用をお薦めしたい。

最後の「部分創作」についてであるが、今回の「カサ地蔵」の執筆にあたって、物語が「舞台用には単純すぎる」ために、「必要に迫られて採用した」という実感を筆者は持っている。しかし、既存のむかし話を原作としてオリジナル作品を書くためには、本稿で紹介したような、「本来なかったものを付け加える」という創作活動は、大いに奨励されてよいものだと考えている。

## 参 考 文 献

1. 佐生武彦, 橋内幸子, 垣見益子, 「英語劇団The Peach Pitsの活動報告と授業への演劇の導入に関する一考察」『中国学園紀要』第5号(2006年6月), pp59-64.
2. 佐生武彦, 橋内幸子, 垣見益子, 「英語劇のシナリオ作成と舞台作り(1)」『中国学園紀要』第6号(2007年6月), pp55-64.
3. 佐生武彦「日本のむかし話：オリジナル英語シナリオ集Vol.1」フクロウ出版(2008年), pp51-64.

